

おわりに

私の37年間の教員生活の中で、一番心のしこりに残っていたことは、普通学級の最後に担任した6年生でした。

この子たちとの1年間で、私の目に見えた成果は、5年生で欠席率ワースト1のクラスが6年生の1年間は出席率ベスト1になったことだけでした。

いじめられている子を支えるために、ほかの子どもたちみんなを敵にまわしているような感じでした。つらい思い出が多く、「出席率ベスト1」の意義も真剣に考えようともしませんでした。

この本をまとめるということは、私の教員生活を振り返ることでもありました。この子たちの残してくれた学習日記を読み返すうちに、この子たちが授業に集中していたことが読み取れました。

- ・輪ゴムを使って倍のイメージを
- ・分数のかけ算のイメージを
- ・分数のわり算のイメージを

この3つをこの子たちの学習日記をもとにして、まとめる気になりました。

クラスは荒れていても、授業には集中していたのです。それが、出席率ベスト1にしたのでしょう。こう思い至ったとき、私の心のしこりは消えたのです。

第3章の「時間の授業の実践」を読み直すなかでも新たに気づいたことがありました。この授業の中で子どもたちは一生懸命、私を支えようとしていたのです。その姿を今になって読み取ることができました。山崎達郎の学習日記はそのことの表れの一端として読み取れました。

「川崎算数・数学サークルの40年」「お母さん算数教室」など、書き残したいものがまだあります。またの機会としたいと思います。

この本をまとめる中で、私は感じました。私は子ども、親、教師仲間の支えあいの中でともに育ちあってきたのだと思います。今日の教育の中で一番欠けているのはこの関係を大事にしていなかったということではないでしょうか。

今日、本が読まれなくなってきたといわれています。特に教育実践の本が読まれなくなり、出版も少なくなっています。

こういう状況の中で、あけび書房の久保則之代表が私を励まし、出版の道筋を立ててくださいました。校正も丁寧にしてくださいました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

